平城京左京三条四坊十一坪（HJG16 次）

－令和３年度発掘調査報告書－

2023

公益財団法人　元興寺文化財研究所

平城京左京三条四坊十一坪（HJG16 次）

－令和３年度発掘調査報告書－

2023

公益財団法人　元興寺文化財研究所

序

このたび、平城京左京三条四坊十一坪の発掘調査報告書が完成いたしました。

古代都市平城京は和銅３年（710）の遷都後暫くすると一時恭仁京、難波宮そして紫香楽宮へと都の移転を繰り返す時期がありました。天平 18 年（746）には再び平城京へと戻り、延暦３年（784）の長岡京遷都による廃都まで、都としての役割を果たしました。

今回の発掘調査では、奈良時代の初めごろに遡る、坪内を分割する溝や複数の建物や塀の跡が確認されました。宅地を分割する溝は坪を三分の一に区切るものであるということですが、平城京をはじめとする都城の宅地の分割方法としては珍しいものです。平安京で一般化していく四行八門制にはつながり得ないこの分割方法が、平城京遷都時の試行として行われていたことが分かる事例となりました。

文化庁が、文化財を観光資源として活用する方向を打ち出し約４年が経ちましたが、この間のＶＲや複製などの先端技術により、その方法は多様なものとなってきました。それらの活用により文化財が生きた財産となっていくことが重要ですが、そのための基礎となる「地道な調査研究」がまず必要であると考えます。

調査研究と活用、この二つが今後とも調和し、それぞれ良い影響を及ぼしあっていくことが望まれます。

最後になりましたが、今回の発掘調査に際して多大なご協力をいただきました開発事業者様、調整・指導をいただきました奈良県、奈良市教育委員会をはじめ、ご協力いただきました関係各位に深く感謝の意を表します。

令和５年３月 31 日

公益財団法人元興寺文化財研究所
理事長　辻村泰善

例言

1. 本書は平城京左京三条四坊十一坪において、共同住宅新築に先立ち実施した発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 調査地は奈良県奈良市大宮町２丁目 146 番地１に所在し、開発面積 1167.26㎡のうち調査対象面積は 410㎡である。
3. 現地調査は株式会社島田組より委託を受けた公益財団法人元興寺文化財研究所が行い、令和３年９月 16 日～同年 11 月５日に実施した。整理報告業務は野村不動産株式会社より委託を受けた公益財団法人元興寺文化財研究所が行い、令和３年 12 月１日～令和５年３月 31 日を整理期間とした。
4. 発掘調査は村田裕介（公益財団法人元興寺文化財研究所）が担当し、坂本俊、瀬戸哲也、江浦洋、武田浩子（公益財団法人元興寺文化財研究所）、小林友佳、三好佑佳（奈良大学大学院）、松田青空、上野喜則、池本優衣（奈良大学）、大崎拳斗（天理大学）、小久保茉優（立命館大学）が補佐した（所属は当時）。
5. 調査地の座標および基準点測量は、公益財団法人元興寺文化財研究所が実施し、株式会社文化財サービスが分担した。
6. 発掘調査における土工等土木部門は株式会社島田組が担当した。
7. 遺構写真は村田が、遺物写真は大久保治（公益財団法人元興寺文化財研究所）が撮影した。
8. 出土遺物の実測および浄書、ないし図面等の整理作業は仲井光代、武田、芝 幹、山本知佳（公益財団法人元興寺文化財研究所）松田、池本、小久保が行った。
9. 本書に使用した土器の分類、編年、年代観については以下の文献を参照した。本文中で触れる分類名、年代表記はこれらに依拠している。

   古代の土器研究会 1992『古代の土器（1）都城の土器集成』

   神野恵・森川実 2010「土器類」『図説平城京事典』柊風社

   奈良国立文化財研究所　1976『平城宮発掘調査報告書Ⅶ』

   奈良国立文化財研究所　1982『平城宮発掘調査報告書XI』

   西弘海 1987『土器様式の成立とその背景』真陽社
10. 発掘調査及び整理報告書作成にかかる費用については、野村不動産株式会社が全額負担した。
11. 当該調査において出土した遺物、実測図、写真は奈良市教育委員会において保管している。
12. 本書の執筆は第１～３、５章を村田が、第４章を木沢直子（公益財団法人元興寺文化財研究所）が行った。本書の編集は村田が行い、芝がこれを補佐した。
13. 発掘調査及び報告書作成に際しては、以下の方々からのご助言、ご協力を頂いた。記して感謝申し上げたい。

    奈良市教育委員会、奈良県文化財保存課、永野智子（敬称略、順不同）

目次

第１章　調査に至る経緯と調査体制 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査体制 …… 1
　第３節　調査の経過（調査日誌抄） …… 2
第２章　周辺環境と既往の調査 …… 4
　第１節　遺跡の立地と環境 …… 4
　第２節　周辺の既往の調査 …… 5
　第３節　本調査の課題 …… 6
第３章　調査の成果 …… 13
　第１節　基本層序と遺構面の認定 …… 13
　第２節　遺構と出土遺物 …… 13
　　（1）検出遺構 …… 13
　　（2）出土遺物 …… 22
第４章　自然科学分析 …… 25
　第１節　樹種同定 …… 25
第５章　総括 …… 27
　第１節　遺構の変遷について …… 27
　第２節　坪内の分割状況について …… 27

図版目次

図 1　調査地位置図（S=1/25,000）…… 4
図 2　今回の調査地と既往の調査地（S=1/2,000 ）…… 5
図 3　全体平面図（S=1/200）…… 7
図 4　壁面土層断面図（1）（S=1/80）…… 7
図 5　壁面土層断面図（2）（S=1/80）…… 9
図 6　壁面土層断面図（3）（S=1/80）…… 11
図 7　SB020 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）…… 14
図 8　SB030 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）…… 15
図 9　SB070 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）…… 16
図 10　SA040 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）…… 17
図 11　SA050 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）…… 17
図 12　SA075 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）…… 18
図 13　SA080 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）…… 19
図 14　SD005 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）…… 20
図 15　SD010 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）…… 20
図 16　SD060 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）…… 21
図 17　SP022 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）…… 22
図 18　出土遺物実測図（S=1/3）…… 23
図 19　木材組織顕微鏡写真…… 26
図 20　SB030b 出土柱材 …… 26
図 21　遺構変遷図（S=1/300）…… 28
図 22　坪内における調査区と SD010 の配置模式図 …… 29
図 23　遺構配置略図（S=1/200）…… 33

表目次

表 1　報告遺物一覧…… 34
表 2　検出遺構および出土遺物一覧（1）…… 35
表 3　検出遺構および出土遺物一覧（2）…… 36

写真図版目次

図版 1
東区全景遠景（西から）
西区全景遠景（東から）
図版 2
調査前風景（東から）
西区全景（東から）
図版 3
西区西壁土層断面（東から）
西区南壁土層断面（北東から）
図版 4
西区南東部検出状況（北西から）
西区下層確認トレンチ土層断面（北から）
図版 5
東区全景（東から）
東側拡張区全景（西から）
図版 6
SB020a 土層断面（西から）
SB020c 土層断面（西から）
図版 7
SB020d 土層断面（西から）
SB020e 土層断面（西から）
図版 8
SB030 全景（北東から）
SB030b 土層断面（北から）
図版 9
SB030c 土層断面（東から）
SB030d 土層断面（東から）
図版 10
SB030e 土層断面（西から）
SB030 完掘状況（北東から）
図版 11
SB070a 土層断面（東から）
SB070b 土層断面（西から）
図版 12
SB070d 土層断面（南から）
SA040b 土層断面（西から）
図版 13
SA050b 土層断面（西から）
SA075a 土層断面（北から）
図版 14
SA080b 土層断面（北から）
SD005 土層断面（北から）
図版 15
SD010 土層断面（南から）
SD060 土層断面（北から）
図版 16
SP022 土層断面（東から）
SP022 完掘状況（北から）
図版 17
SB020・030、SA050 出土遺物
図版 18
SA050、SD010 出土遺物
図版 19
SP022、素掘小溝、表土出土遺物

第１章　調査に至る経緯と調査体制

第１節　調査に至る経緯

令和３年５月28日付けで野村不動産株式会社より、共同住宅新築に伴う埋蔵文化財発掘調査の届出が提出された。当地が平城京の範囲であることから、同年８月17日に奈良県文化財保存課より奈良市教育委員会を通じて発掘調査の実施が指示された。これを受けて奈良市教育委員会は発掘調査実施に向けた協議を開始したが、工期を勘案した結果、公共機関による発掘調査は困難と判断されたため、公益財団法人元興寺文化財研究所へ発掘調査を依頼することとなった。

同年９月９日に奈良県文化財保存課より発掘調査の依頼を受けた公益財団法人元興寺文化財研究所は、同年９月10日、平城京左京三条四坊十一坪発掘調査業務に係る委託契約を野村不動産株式会社から現地調査経費の委託を受けていた株式会社島田組と締結、発掘調査届出を提出のうえ、同年９月16日より現地調査を開始した。

現地調査は同年11月５日に終了し、その後野村不動産株式会社と整理報告書作成業務に係る委託契約を締結、すみやかに整理・報告書作成業務に移行した。現地調査から報告書作成に至る間、野村不動産株式会社の全面的な支援・協力があった。また、奈良県文化財保存課、奈良市教育委員会からの適切なご指導を賜った結果、調査・整理作業を無事に終了することが出来た。関係各位に感謝する次第である。

第２節　調査体制

発掘調査並びに整理・報告書作成は以下の体制で実施した。

（発掘調査）

調査指導：奈良県文化財保存課・奈良市教育委員会

調査主体：公益財団法人元興寺文化財研究所

理 事 長　辻村泰善

所　　長　田邉征夫

事務局長　江島和哉

総合文化財センター長　塚本敏夫

文化財調査修復研究グループ

リーダー　金山正子

研究員　村田裕介（現地調査担当）

研究員　坂本　俊

研究員　瀬戸哲也

技　師　江浦　洋

現地作業員：株式会社島田組

測　　量：公益財団法人元興寺文化財研究所・株式会社文化財サービス

（整理報告）

調査指導：奈良県文化財保存課・奈良市教育委員会

調査主体：公益財団法人元興寺文化財研究所

理 事 長　辻村泰善

所　　長　田邉征夫

事務局長　江島和哉

総合文化財センター長　山田哲也

文化財調査修復研究グループ

統括マネージャー　雨森久晃

主　務　　村田裕介（整理報告担当）

研究員　　坂本　俊

研究員　　瀬戸哲也

技　師　　江浦　洋

第３節　調査の経過（調査日誌抄）

令和３年

9 月 16 日（木）　重機、機材搬入。奈良市教育委員会立会いのもと、調査区の設定および調査区西からの重機掘削を行う。地表から約 1.0 m下で地山を検出。全体に攪乱が多く、機械掘削に並行して、攪乱の掘削を進める。

9 月 21 日（火）　調査区西端で砂層を確認。自然流路と考えられる。

9 月 22 日（水）　南北方向の溝（SD010）を確認。埋土は砂を主体とする。

9 月 24 日（金）　西区の機械掘削完了。遺構検出を開始する。西区東側で掘立柱建物を 2 棟確認。

9 月 27 日（月）　遺構検出を継続。西区西側では掘立柱塀と考えられる柱穴列を確認。

9 月 28 日（火）　攪乱の掘削が完了し、素掘小溝などの遺構の掘削へ移る。

9 月 29 日（水）　SD010 を掘削。奈良時代の須恵器蓋が出土。

10 月 5 日（火）　西区全景撮影、空中測量を実施。その後、柱穴の掘削を開始。

10 月 7 日（木）　西区西側の砂層にサブトレンチを設定し、掘削。自然流路と考えられる。土器小片が出土するが時期不明。

10 月 11 日（月）　西区を埋め戻し、東区の機械掘削を開始する。

10 月 12 日（火）　東区の機械掘削継続。地山は地表面から約 0.5 m下で確認され、西から東へかけて標高が高くなっていることが分かる。柱穴が複数確認できる。

10 月 14 日（木）　東区機械掘削完了。遺構面を精査し、攪乱の掘削を行う。

10 月 15 日（金）　東区東端で南北方向の溝（SD060）を確認。SD010 と SD060 の心心間距離は約 24 mで 80 尺と考えられる。

10 月 18 日（月）　SD060 を掘削。遺物の出土は低調。

10 月 22 日（金）　東区全景撮影、空中測量を実施。引き続いて柱穴の掘削に着手。

10 月 26 日（火）　東区下層確認トレンチ掘削。奈良市教育委員会による調査状況の確認。

10 月 27 日（水）　東側拡張トレンチを掘削。顕著な遺構は確認できない。

10 月 29 日（金）　埋め戻し開始。
11 月 1 日（月）　埋め戻し完了。奈良市教育委員会による調査完了の確認。
11 月 5 日（金）　機材撤収、現地調査終了。

調査風景

第２章　周辺環境と既往の調査

第１節　遺跡の立地と環境

調査地は奈良市大宮町２丁目 146 番地１に所在し、平城京左京三条四坊十一坪の南東部にあたる。調査前は立体駐車場が存在する状況であり、地表面は東から西へ緩やかに降る。

調査地の周辺は、奈良盆地北東部に位置する。この地域は木津川屈曲部からウワナベ古墳横を抜けて帯解付近へ続く佐保田撓曲と、奈良市大安寺町から天理市丹波市町付近まで延びる帯解断層の間に存在する低位段丘面と佐保川の自然堤防の背面に形成した後背平野との境界付近にあたる（産業技術総合研究所 2014）。

また、現状では北に西流する佐保川は、奈良時代に流路が付け替えられており、本来はさらに上流の東包永町以北のように北東から南西にむけて流れていたものと考えられる。調査区付近はその旧自然流路の範囲となっていた可能性もある。

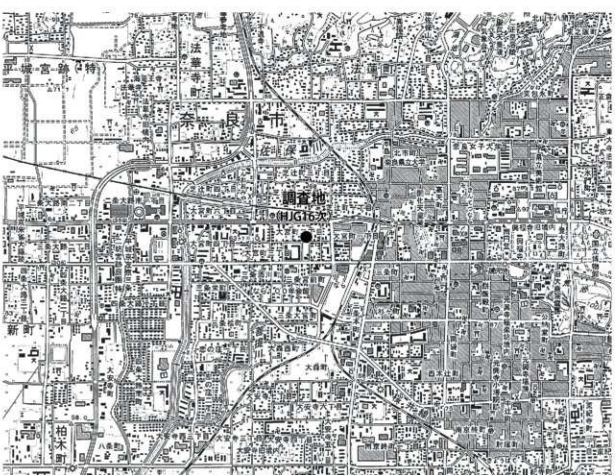


図１　調査地位置図（S=1/25,000）

第２節　周辺の既往の調査

これまでの同坪の調査には、奈良市教育委員会による昭和 58 年度調査（市 61 次）、市 130 次調査、奈良県立橿原考古学研究所による県 1991 年度調査がある。

市 61 次調査では東四坊坊間路東側溝と西側溝の一部が確認されている（奈良市教育委員会 1983）。東四坊坊間路はさらに南で 1982 年に奈良国立文化財研究所により行われた平城京左京四条四坊九坪の発掘調査でも確認されており、ここでは両側溝が確認されたことにより、東四坊坊間路の幅員が両側溝心心間で約 9.0 m、約 30 小尺と考えられている（奈良国立文化財研究所 1983）。

市 130 次調査では、奈良時代の掘立柱建物、掘立柱塀、東西方向の溝が確認されており、2 時期以上の遺構の変遷が考えられる。白磁獣脚円面硯が出土しており希少な事例である（奈良市教育委員会 1988）。

県 1991 年度調査は、今回の調査地の北西に近接しており、奈良時代後半の掘立柱建物、坪を南北に二分する東西方向の溝などが確認されているが、遺構の密度はやや希薄である（奈良県立橿原考古学研究所 1992）。

二条条間南小路を挟んで南側に位置する十二坪では奈良県立橿原考古学研究所により 1986 年に調査が行われており、3 時期の遺構変遷が確認された（県 1986 年度）。特に坪内を 1/3 に区切る南北方向

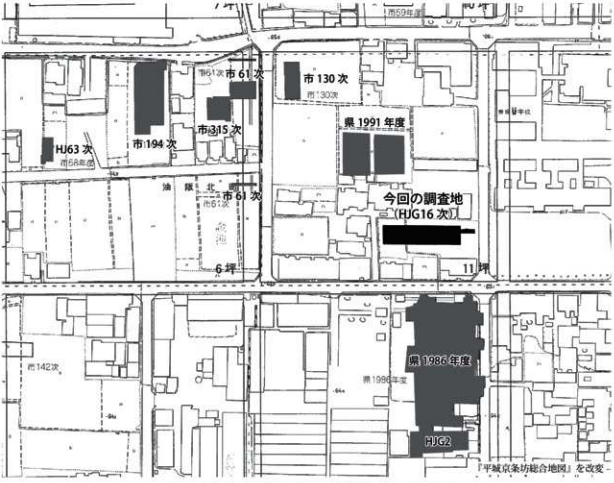


図２　今回の調査地と既往の調査地（S=1/2,000）

の溝が検出されており、坪内の使用状況を示すものとして注意が必要である（奈良県立橿原考古学研究所 1987）。

また、東四坊坊間路を挟んで西側に位置する六坪では、奈良市教育委員会による市 194 次調査、市 315 次調査が行われている。市 194 次調査では 5 時期以上の遺構の変遷が明らかになるとともに、三彩平瓦、鋳造関係遺物などが出土していることは重要である（奈良市教育委員会 1991）。市 315 次調査では奈良時代後半の掘立柱建物、掘立柱塀、井戸などが確認されている（奈良市教育委員会 1995）。

周辺の坪の調査においても奈良時代を中心とした遺構、遺物が確認されており、本調査地も同様の成果が予想された。このことから坪内の利用状況についての解明を目的として調査を行った。

第 3 節　本調査の課題

以上のような周辺の調査成果を踏まえ、本調査でも奈良時代を中心とした遺構・遺物が予想されることから、奈良時代の遺構の展開、特に坪内土地利用の解明を主な課題とした。また、時期の判明する奈良時代の遺構としては後半に偏る傾向が認められる点にも留意して調査を行った。

《参考・引用文献》
独立行政法人産業技術総合研究所 2014『平成 25 年度「活断層の補完調査」成果報告書　奈良盆地東縁断層帯』
奈良市教育委員会 1983「平城京左京三条四坊六・十一坪（東四坊坊間路）の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書－昭和 58 年度－』
奈良市教育委員会 1988「平城京左京三条四坊十一坪の調査　第 130 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書－昭和 62 年度－』
奈良市教育委員会 1991「平城京左京三条四坊六坪の調査　第 194 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書－平成 2 年度－』
奈良市教育委員会 1995「平城京左京三条四坊六坪の調査　第 315 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書－平成 6 年度－』
奈良県立橿原考古学研究所 1987『平城京左京三条四坊十二坪の調査』奈良県文化財調査報告書第 52 集
奈良県立橿原考古学研究所 1992「平城京左京三条四坊十一坪の調査」『奈良県遺跡調査概報 1991 年度』
奈良国立文化財研究所 1983『平城京左京四條四坊九坪発掘調査報告』
奈良文化財研究所 2003『平城京条坊総合地図』

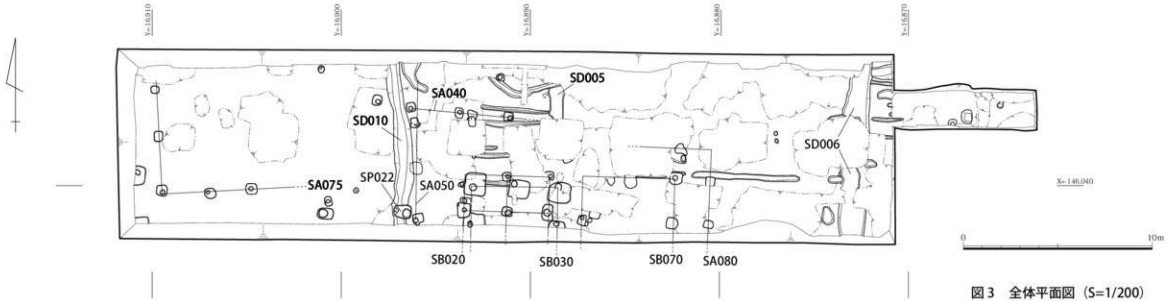


図3　全体平面図（S=1/200）

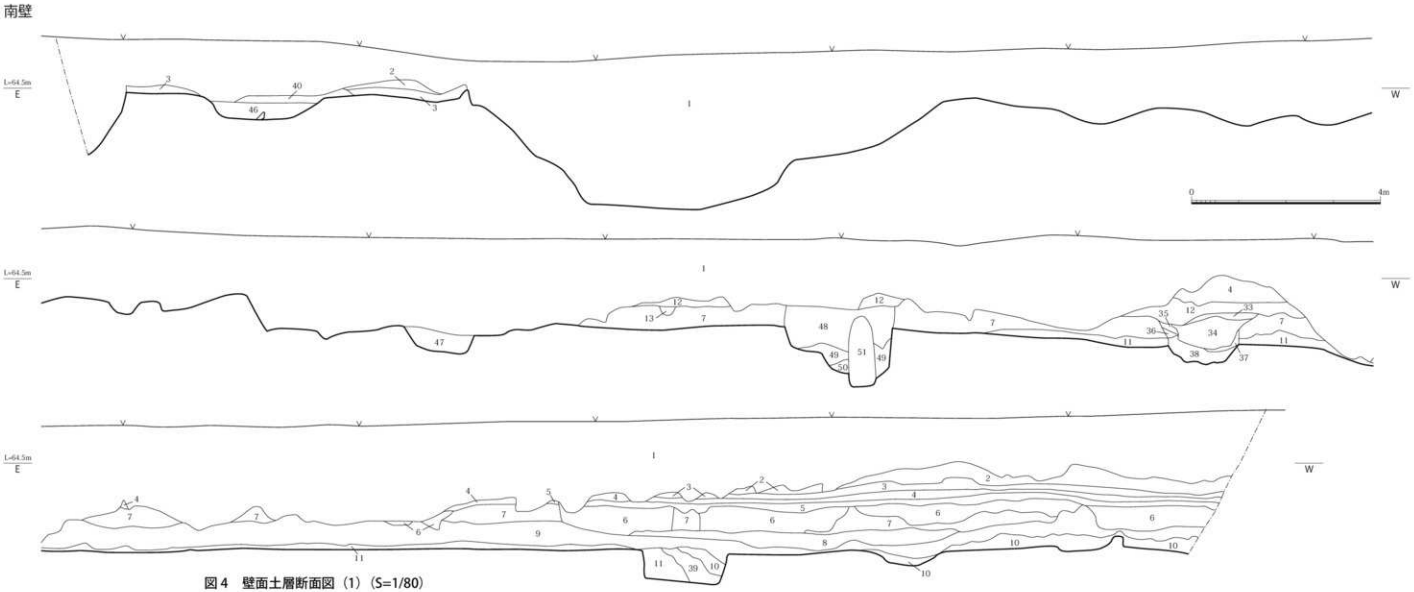


図4　壁面土層断面図（1）（S=1/80）

北壁

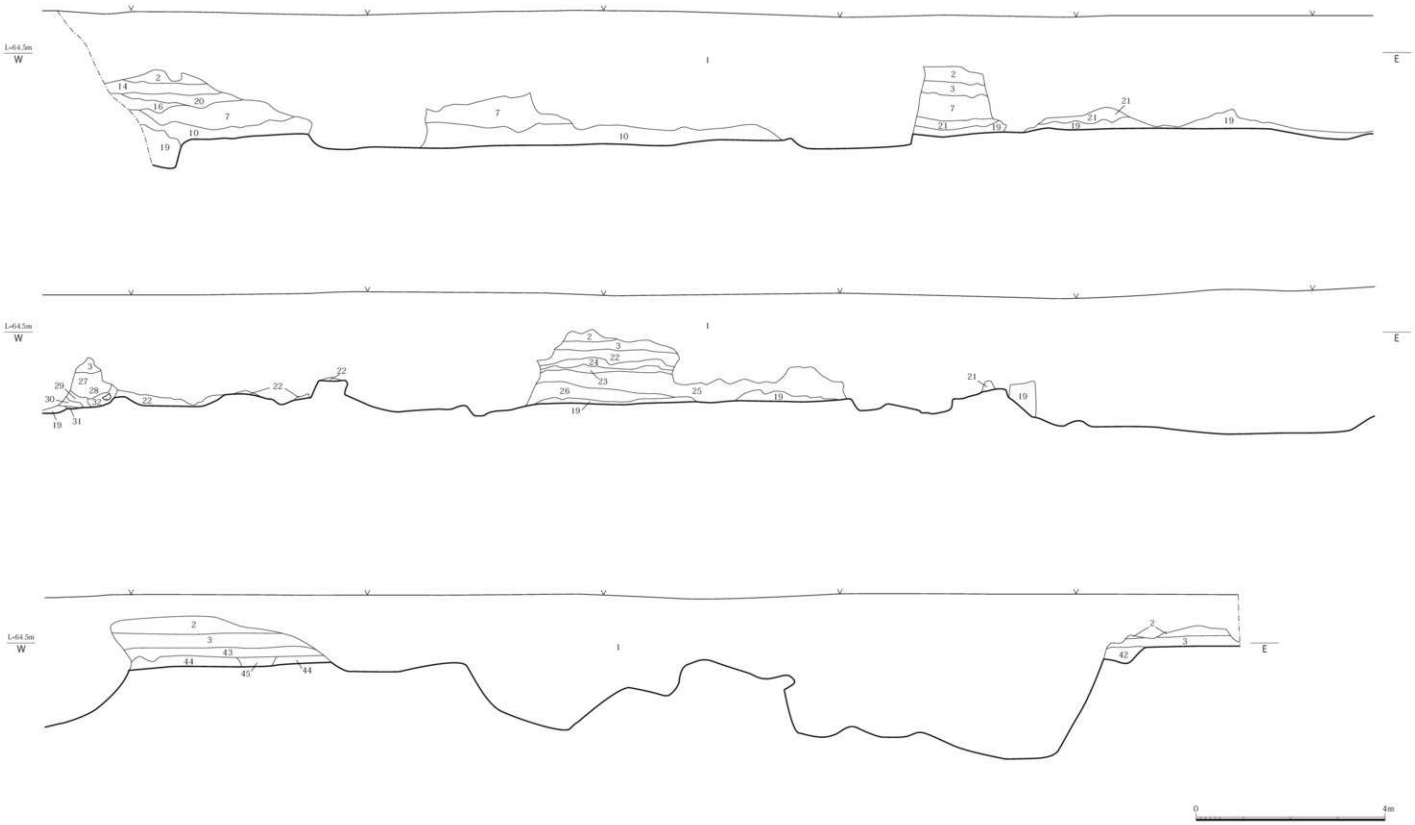
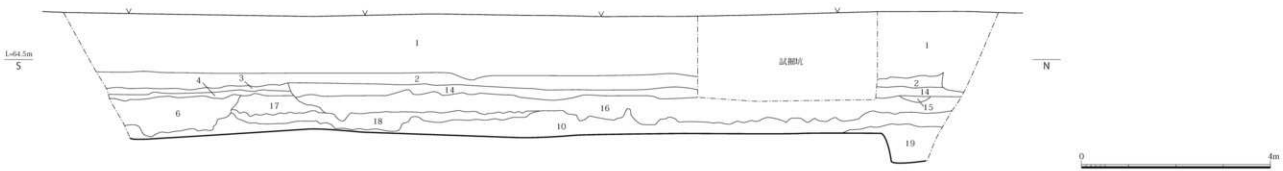
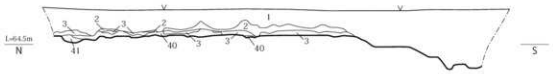


図5　壁面土層断面図（2）（S=1/80）

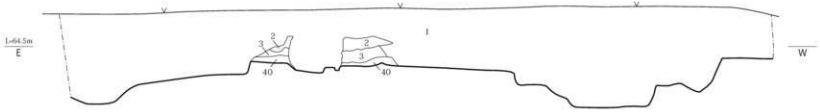
西壁



東壁



東側拡張区南壁



1. 造成土
2. 黒褐 10YR3/1 細礫混細砂（床土）
3. 暗灰黄 2.5Y5/2 中砂混細砂、浅黄 2.5Y4/7 中砂（帯状に混じる）（耕作土）
4. 灰オリーブ 5Y5/2 粗砂混細砂（上半酸化鉄斑文あり）（耕作土）
5. 灰オリーブ 5Y5/3 粗砂混細砂（斑に酸化鉄斑文あり）（耕作土）
6. 黄灰 2.5Y5/1 粗砂混細砂（径 20 ～ 80mm の亜角礫状地山ブロックを多く含む）（中世土坑穴）
7. 黄褐 2.5Y5/4 シルト（地山）
8. オリーブ黄 5Y6/3 シルト
9. 灰オリーブ 5Y5/2 シルト～細砂
10. 灰オリーブ 5Y5/2 中砂～粗砂（上部酸化鉄斑文あり、葉理あり）
11. 褐 10YR4/4 シルト
12. 灰黄 2.5Y6/2 中砂混細砂（耕作土）
13. 灰黄 2.5Y6/2 粗砂混細砂（径 5 ～ 10mm の亜角礫状地山ブロック、炭化物少量含む）
14. 暗灰黄 2.5Y4/2 細礫混細砂
15. 暗灰黄 2.5Y5/2 細礫混細砂（炭化物を少量含む）
16. 黄褐 2.5Y5/3 細礫混細砂（径 20 ～ 80mm の亜角礫状地山ブロックを多量、炭化物を少量含む）
17. 灰黄 2.5Y6/2 粗砂混細砂（径 5 ～ 20mm の亜角礫状地山ブロック、炭化物少量含む）
18. にぶい黄 2.5Y6/4 粗砂混シルト（径 5 ～ 20mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）
19. 黄褐 10YR5/6 シルト（マンガン結核含む）
20. にぶい黄褐 10YR5/3 粗砂～細礫混細砂（径 5 ～ 20mm の亜角礫状地山ブロック少量、炭化物極少量含む）
21. 黄褐 2.5Y5/3 粗砂混細砂
22. 暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂～細礫混粗砂～中砂
23. 灰オリーブ 5Y5/2 細礫混中～粗砂（葉理あり）
24. 灰 5Y6/1 細礫混粗砂（葉理あり）
25. にぶい黄褐 10YR4/3 細礫混中砂（葉理あり）
26. 灰黄 2.5Y6/2 粗砂～細礫（葉理あり）
27. 灰黄褐 10YR4/2 細砂～中砂（径 5 ～ 20mm の亜角礫状地山ブロック少量含む）
28. 暗灰黄 2.5Y5/2 細砂
29. 灰黄 2.5Y6/2 細砂～中砂（径 10 ～ 30mm の亜角礫状地山ブロックを含む、葉理あり）
30. 灰黄 2.5Y7/2 粗砂（径 5 ～ 10mm の亜角礫状地山ブロックを含む、葉理あり）
31. 暗灰黄 2.5Y5/2 中砂～粗砂
32. 黄灰 2.5Y5/1 中砂混細砂
33. 灰オリーブ 5Y5/2 粗砂混細砂～中砂（径 10 ～ 30mm の亜角礫状地山ブロック含む）（SD010）
34. 灰黄 2.5Y6/2 中砂～粗砂ラミナ（上方細粒化）（SD010）
35. 灰オリーブ 5Y5/2 中砂（径 5 ～ 10mm の亜角礫状地山ブロック少量含む）（SD010）
36. 黄灰 2.5Y6/1 中砂ラミナ（SD010）
37. 黄灰 2.5Y6/1 粗砂混中砂（径 5 ～ 30mm の亜角礫状地山ブロック多量含む、ラミナ）（SD010）
38. 灰黄 2.5Y6/2 粗砂混細砂～中砂（径 5 ～ 20mm の亜角礫状地山ブロック、炭化物少量含む、ラミナ）（SD010）
39. 灰 5Y6/1 極細砂混シルト（酸化鉄斑文あり、葉理あり）
40. 黄灰 2.5Y5/1 粗砂混細砂（マンガン少量含む、酸化鉄斑文あり）（素掘小溝）
41. 灰 5Y6/1 粗砂混細砂（マンガン結核極少量含む、酸化鉄斑文あり）（S-51）
42. 黄灰 2.5Y5/1 粗砂混細砂（径 10 ～ 80mm の亜角礫状地山ブロック少量含む）（SD060）
43. 灰 5Y5/1 粗砂混細砂、酸化鉄斑文あり
44. 灰オリーブ 5Y5/2 細砂～中砂
45. 灰オリーブ 7.5Y5/2 粗砂混細砂
46. 灰 5Y5/1 粗砂混細砂（径 10 ～ 30mm の亜角礫状地山ブロック少量含む）（SD060）
47. 褐灰 10YR5/1 中礫混細砂（径 120mm 以下の亜角礫状地山ブロックを多量、炭化物少量含む）（掘方）（SB030a）
48. 黄灰 2.5Y5/1 シルト（径 300 ～ 1000mm の亜角礫状地山ブロック、マンガン結核多量に含む）（掘方）（SB030b）
49. 黄灰 2.5Y4/1 細砂混シルト（径 200 ～ 400mm の亜角礫状地山ブロック中量、炭化物少量含む）（掘方）（SB030b）
50. 黄褐 2.5Y5/3 シルト（亜角礫状地山ブロック多量に含む）（掘方）（SB030b）
51. 灰 2.5Y4/1 細砂混シルト（炭化物少量含む）（浅穴）（SB030b）

図 6　壁面土層断面図（3）（S=1/80）

第３章　調査の成果

第１節　基本層序と遺構面の認定

調査区は建築予定部分のうちの南北 10m、東西 41m に設定を行った。掘削土の置き場との兼ね合いもあり、調査区の西側 25m の部分（西区）から調査を行い、その完了後、東側の 16m の部分（東区）の調査を行った。東区調査の完了後には、東側拡張区として南北 3m、東西 8m の調査区を設定し、追加の調査を行った。

調査区の遺構面の標高は、東で 64.5m 程度、西で 64.1m 程度を測り、東から西へと緩やかに傾斜している。層序は、全体的に現代の攪乱が著しく、また調査区中央あたりで近世以降の耕作の際に段差が設けられていたため一定でないが、上からおおよそ層厚約 60cm の現代盛土、層厚 10 ～ 20cm の近世から現代の耕土、層厚 10cm の中世耕土となる。中世耕土を除去した褐色シルト～細砂の面を遺構面とした。

西区ではその西寄りに旧河道と考えられる砂層が堆積しており、西区の遺構面の調査完了後、粗砂の堆積がみられる部分に河道の方向に直交する下層確認トレンチを設定し、掘削を行った。砂層からは土器片が少量出土している。

東区でも同様に下層確認を行い、遺構面から約 60cm 下まで掘削を行ったが、遺構及び遺物は確認されなかった。

第２節　遺構と出土遺物

（1）検出遺構

掘立柱建物

SB020（図 7、図版 6・7）

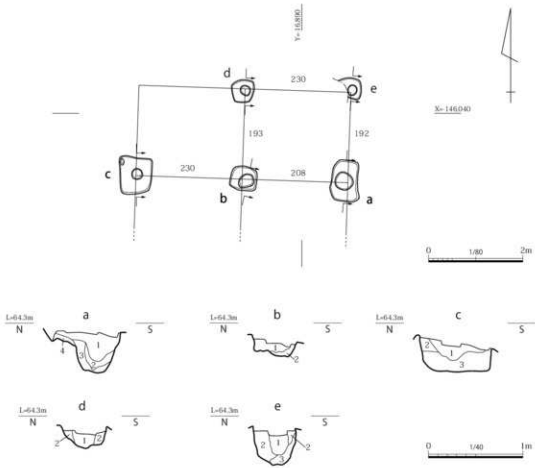
調査区中央部で検出した。重複関係から SB030 に後出する。東西二間、南北二間以上の規模を持つ総柱建物であると考えられる。柱間は東西方向で 2.1 ～ 2.3m、南北方向で 1.90 ～ 1.93m であり、東西方向がやや広い。主軸方向は北で東へ 1° 08′ 振れるものである。柱穴は一辺 0.5 ～ 0.8m 程度の平面隅丸方形を呈する。柱材はいずれも抜き取られているが、抜き取りの痕跡からは直径 20cm の柱が想定できる。

出土遺物には奈良時代に属する土師器・瓦などがある。

SB030（図 8、図版 8 ～ 10）

調査区中央部で検出した。重複関係から SB020 に先行する。東西二間、南北二間以上の規模を持つ。柱間は 1.97 ～ 2.30m、主軸方向は東で北へ 0° 15′ 振れるものである。柱穴は一辺 0.9 ～ 1.2m 程度の平面隅丸方形を呈する。柱材は柱穴 b を除き抜き取られている。柱穴 b で検出された柱材は直径約 25cm を測る（第 4 章参照）。

出土遺物には土師器・須恵器・瓦などがあり、平城宮土器Ⅲに属するものである。



a
1. 暗褐 10YR3/3 極細砂混シルト（径 200 ～ 300mm の亜角礫状地山ブロックを多量、マンガン結核少量含む）（抜取）
2. 暗灰黄 2.5Y4/2 細砂混シルト（抜取）
3. 暗灰黄 2.5Y4/2 中礫混シルト（径 300 ～ 400mm の亜円礫状地山ブロック、マンガン結核少量含む）（抜取）
4. 暗褐 10YR3/4 細砂混シルト（径 50 ～ 70mm の亜角礫状地山ブロックを多量に含む）（掘方）

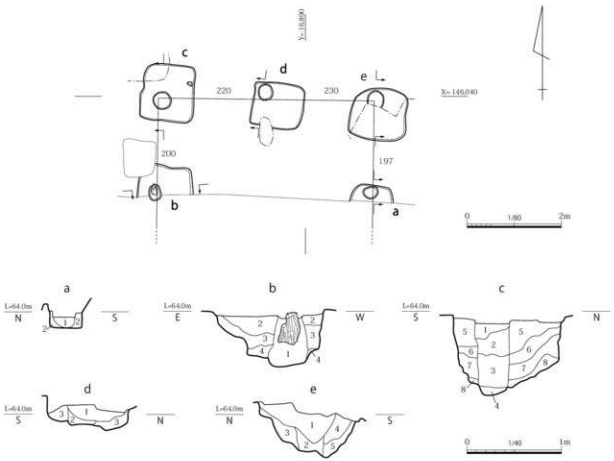
b
1. 黄灰 2.5Y5/1 細砂（径 40mm 以下の亜円礫状地山ブロック多量に含む）（抜取）
2. 黄灰 2.5Y6/1 中砂混細砂（径 20mm 以下の亜円礫状地山ブロック多量に含む）（掘方）

c
1. 暗灰黄 2.5Y4/2 細砂（径 40mm 以下の亜円礫状地山ブロック、炭化物含む）（抜取）
2. 黄灰 2.5Y5/1 細砂（径 70mm 以下の亜角礫状地山ブロック多量、炭化物少量含む）（掘方）
3. 褐灰 10YR5/1 細砂（径 40mm 以下の亜角礫状地山ブロック多量、炭化物少量含む）（掘方）

d
1. 灰黄 2.5Y6/2 粗砂混細砂（径 10 ～ 30mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）（抜取）
2. 暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂混細砂（径 5 ～ 20mm の亜角礫状地山ブロック含む）（掘方）

e
1. 黄灰 2.5Y5/1 細砂混シルト（径 20 ～ 30mm の亜角礫状地山ブロック、マンガン結核少量含む）（抜取）
2. 黄灰 2.5Y5/1 細砂混シルト（径 50 ～ 100mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）（掘方）
3. 黄灰 2.5Y5/1 中礫混シルト（径 30 ～ 40mm の亜角礫状地山ブロック多量、マンガン結核を少量含む）（掘方）

図 7　SB020 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）



a

1. 灰オリーブ 5Y5/2 細礫混細砂（径 40mm 以下の亜円礫状地山ブロックを多量、炭化物少量含む）（抜取）
2. 褐灰 10YR5/1 中礫混細砂（径 120mm 以下の亜角礫状地山ブロックを多量、炭化物少量含む）（掘方）

b

1. 灰 2.5Y4/1 細砂混シルト（炭化物少量含む）（柱痕）
2. 黄灰 2.5Y5/1 シルト（径 300 ～ 1000mm の亜角礫状地山ブロック、マンガン結核多量に含む）（掘方）
3. 黄灰 2.5Y4/1 細砂混シルト（径 200 ～ 400mm の亜角礫状地山ブロック中量、炭化物少量含む）（掘方）
4. 黄褐 2.5Y5/3 シルト（亜角礫状地山ブロック多量に含む）（掘方）

c

1. 灰オリーブ 5Y5/2 細砂混シルト（径 10 ～ 400mm の亜角礫状地山ブロック多量、炭化物少量含む）（抜取）
2. 灰 5Y5/1 細砂混シルト（径 30 ～ 500mm の亜角礫状地山ブロック多量、炭化物、土器片を少量含む）（抜取）
3. 暗灰黄 2.5Y4/2 細礫混シルト（径 20 ～ 40mm の亜角礫状地山ブロック中量含む、酸化鉄斑文あり）（抜取）
4. 黒褐 2.5Y3/1 シルト（径 40 ～ 100mm の亜円礫状地山ブロック少量含む）（抜取）
5. 灰オリーブ 5Y4/2 細礫混シルト（径 10 ～ 300mm の亜角礫状地山ブロック多量、炭化物、マンガン結核少量含む、酸化鉄斑文あり）（掘方）
6. 灰オリーブ 5Y4/2 中礫混シルト（径 20 ～ 100mm の亜角礫状地山ブロック多量、マンガン結核中量含む、酸化鉄斑文あり）（掘方）
7. 暗灰黄 2.5Y5/2 中細砂混シルト（径 10 ～ 100mm の亜角礫状地山ブロック、マンガン結核を中量、炭化物少量含む）（掘方）
8. 黄灰 2.5Y5/1 細礫混シルト（径 20 ～ 40mm の亜角礫状地山ブロック少量、マンガン結核多量に含む、酸化鉄斑文あり）（掘方）

d

1. 暗灰黄 2.5Y4/2 中砂混細砂（径 70mm 以下の亜円礫状地山ブロック中量、炭化物少量含む）（抜取）
2. 暗灰黄 2.5Y4/2 細砂（径 70mm 以下の亜角礫状地山ブロック、炭化物少量含む）（抜取）
3. オリーブ褐 2.5Y4/3 粗砂混細砂（径 100mm 以下の亜円礫状地山ブロック多量、炭化物少量含む）（掘方）

e

1. オリーブ褐 2.5Y4/3 細礫混細砂（径 30 ～ 40mm の亜角礫状地山ブロックを多量、炭化物少量含む）（抜取）
2. 灰 5Y4/1 細砂混シルト（径 30 ～ 40mm の亜角礫状地山ブロック、炭化物、マンガン結核少量含む）（抜取）
3. 褐灰 10YR3/1 中礫混シルト（径 10 ～ 80mm の亜角礫状地山ブロック、炭化物少量含む）（掘方）
4. オリーブ黒 5Y3/2 中礫混細砂（径 30 ～ 40mm の亜角礫状地山ブロック、炭化物、マンガン結核少量含む）（掘方）
5. オリーブ褐 5Y4/3 極細砂混シルト（径 10 ～ 40mm の亜角礫状地山ブロック、マンガン結核多量に含む）（掘方）

図 8　SB030 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）

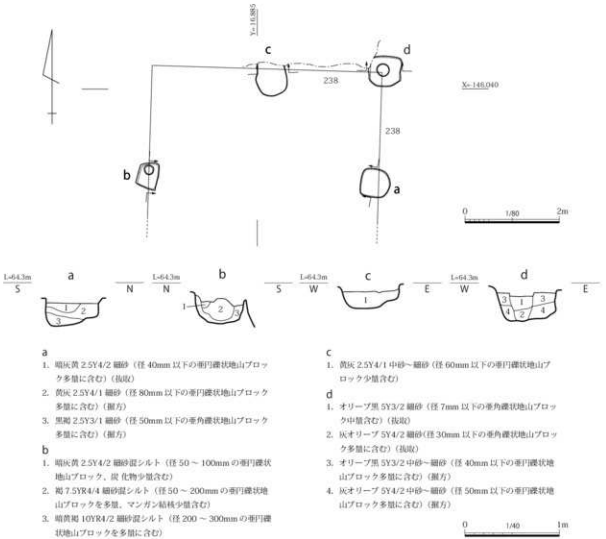


図 9　SB070 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）

SB070（図 9、図版 11・12）

調査区中央部で検出した。東西二間、南北二間以上の規模を持つ。柱間は 2.38m、主軸方向は北で東へ 2° 47′ 振れるものである。柱穴は撹乱により多くが失われており、4 基を検出したのみであり、一辺 0.55 ～ 0.75m 程度の隅丸方形を呈する。柱材はいずれも抜き取られているが、抜き取りの痕跡からは直径 20cm 前後の柱が想定できる。

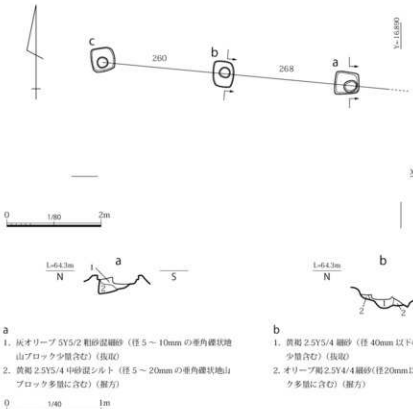
出土遺物には奈良時代に属する土師器・瓦があるが、小片のため図示していない。

掘立柱塀

SA040（図 10、図版 12）

調査区中央部で検出した。重複関係から SP022 に先行する。東西二間分を検出し、柱穴 c は SA050 柱穴 c と近接する。柱間は 2.6m 程度、主軸方向は西で北へ 10° 34′ 振れるものである。柱穴は一辺 0.5m 程度の隅丸方形を呈する。柱材はいずれも抜き取られているが、抜き取りの痕跡からは直径 20cm 前後の柱が想定できる。

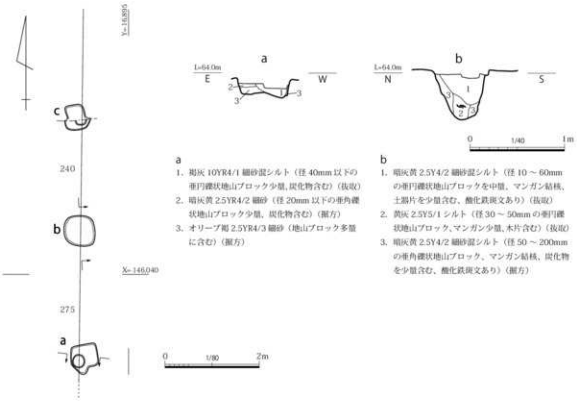
出土遺物には奈良時代に属する土師器があるが、小片のため図示していない。



a
1. 灰オリーブ 5Y5/2 粗砂混細砂（径 5 ～ 10mm の亜角礫状地山ブロック少量含む）（抜取）
2. 黄褐 2.5Y5/4 中砂混シルト（径 5 ～ 20mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）（掘方）

b
1. 黄褐 2.5Y5/4 細砂（径 40mm 以下の亜円礫状地山ブロック少量含む）（抜取）
2. オリーブ褐 2.5Y4/4 細砂（径20mm以下の亜円礫状地山ブロック多量に含む）（掘方）

図 10　SA040 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）



a
1. 褐灰 10YR4/1 細砂混シルト（径 40mm 以下の亜円礫状地山ブロック少量, 炭化物含む）（抜取）
2. 暗灰黄 2.5YR4/2 細砂（径 20mm 以下の亜角礫状地山ブロック少量, 炭化物含む）（掘方）
3. オリーブ褐 2.5YR4/3 細砂（地山ブロック多量に含む）（掘方）

b
1. 暗灰黄 2.5Y4/2 細砂混シルト（径 10 ～ 60mm の亜円礫状地山ブロックを中量, マンガン結核, 土器片を少量含む, 酸化鉄斑文あり）（抜取）
2. 黄灰 2.5Y5/1 シルト（径 30 ～ 50mm の亜円礫状地山ブロック, マンガン少量, 木片含む）（抜取）
3. 暗灰黄 2.5Y4/2 細砂混シルト（径 50 ～ 200mm の亜角礫状地山ブロック, マンガン結核, 炭化物を少量含む, 酸化鉄斑文あり）（掘方）

図 11　SA050 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）

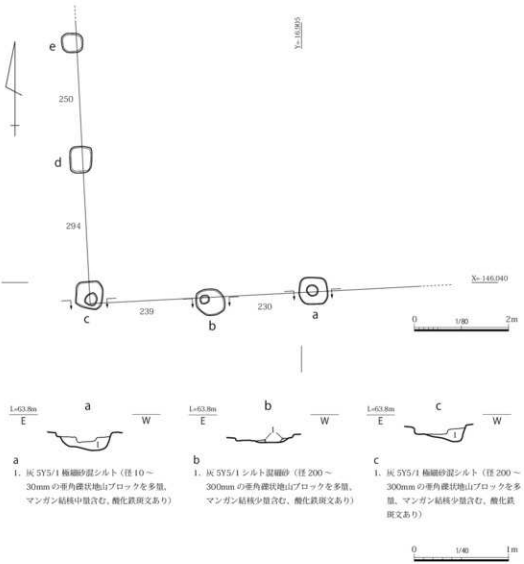


図 12　SA075 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）

SA050（図 11、図版 13）

調査区中央部で検出した。重複関係から SD010 に先行するが、同時期に機能していた可能性もある。南北二間分を検出し、柱穴 c は SA040 柱穴 c と近接する。柱間は 2.40 ～ 2.75m、主軸方向は北で東へ 0° 34′ 振れるものである。柱穴は一辺 0.5m 前後の隅丸方形を呈する。柱材はいずれも抜き取られているが、抜き取りの痕跡からは直径 15cm 前後の柱が想定できる。

出土遺物には土師器・須恵器・瓦などがあり、平城宮土器Ⅲに属するものである。

SA075（図 12、図版 13）

調査区西寄りで検出した。東西二間、南北二間分を検出し、平面「L」字状に並ぶ。柱間は東西が 2.3m 程度、南北が 2.50 ～ 2.94m を測り、南北方向がやや広くなる。主軸方向は北で東へ 3° 53′ 振れるものである。柱穴は一辺 0.4 ～ 0.6m 程度の隅丸方形を呈する。いずれの柱穴も遺存が悪く、ごくわずかの深さが確認できたのみである。

出土遺物はない。

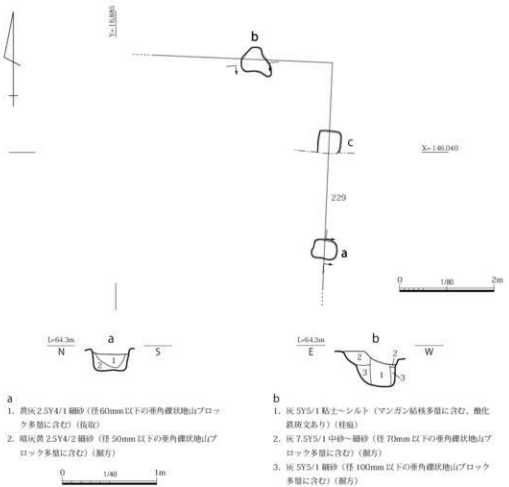


図 13　SA080 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）

SA080（図 13、図版 14）

調査区東寄りで検出した。東西一間、南北二間分を検出し、平面「L」字状に並ぶ。柱間は 1.87 ～ 2.28m、主軸方向は北で東へ 6° 29′ 振れるものである。柱穴は撹乱により多くが失われており、3 基を検出したのみであり、一辺 0.6m 程度の隅丸方形を呈する。柱材はいずれも抜き取られているが、抜き取りの痕跡からは直径 20cm 程度の柱が想定できる。

出土遺物には奈良時代に属する土師器片があるが、小片のため図示していない。

溝

SD005（図 14、図版 14）

調査区中央部で検出した。幅 0.55 ～ 0.85m で、約 1.7m 検出した南北方向の溝である。検出面からの深さは約 0.1m を測り、断面形態は逆台形を呈する。底面の標高は北端で 64.150m、南端で 64.146m でありほぼ水平である。主軸方位は北で西へ 2° 40′ 振れるものである。埋土は細砂を主体とし、下層には地山ブロックが混じる。自然堆積による埋没と考えられる。

出土遺物には奈良時代に属する土師器・須恵器・瓦などがあるが、小片のため図示していない。

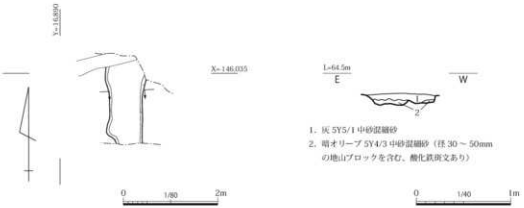


図 14　SD005 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）

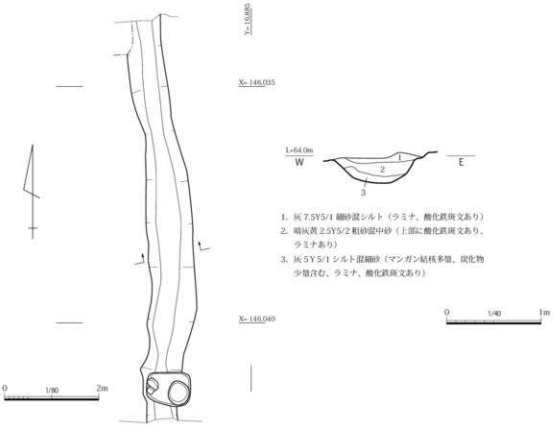


図 15　SD010 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）

SD010（図 15、図版 15）

調査区中央部で検出した。重複関係から SA050 に先行する。幅 0.75 ～ 0.95m で、約 8.5m 検出した南北方向の溝である。検出面からの深さは 0.3m を測り、断面形態は「U」字形を呈する。底面の標高は北端で 63.753m、南端で 63.685m、比高は約 0.13m を測り、北から南への勾配を持つ。主軸方位は北で西へ 2° 44′ 振れるものだが、やや蛇行している。埋土は細砂～粗砂を主体とし、ラミナを観察できることから、流水とともに埋没が進んだと考えられる。

出土遺物には土師器・須恵器・瓦などがあり、平城宮土器Ⅰに属するものである。

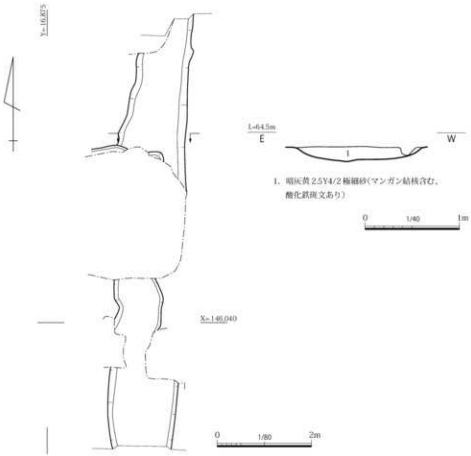


図 16　SD060 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）

SD060（図 16、図版 15）

調査区東寄りで検出した。幅 0.9 ～ 1.4m で、約 9.0m 検出した南北方向の溝である。検出面からの深さは 0.15m を測り、断面形態は浅い「U」字形を呈する。底面の標高は北端で 64.213m、南端で 64.178m、比高はほぼないが北から南への勾配を僅かに持つ。主軸方位は北で東へ 2° 45′ 振れる。埋土は細砂を主体とし、自然堆積による埋没と考えられる。

出土遺物には奈良時代に属する土師器・須恵器・瓦などがあるが、小片のため図示していない。

ピット

SP022（図 17、図版 16）

調査区中央部南端で検出した。重複関係から SD010 に後出する。0.95 × 0.70m 程度の平面隅丸方形を呈する。遺構面からの深さは約 0.3m を測る。底部では礫を 2 点検出している。埋土は地山ブロックを含む細砂からなり、柱が据えられていたものと考えられる。

出土遺物には奈良時代に属する土師器・須恵器・瓦などがある。

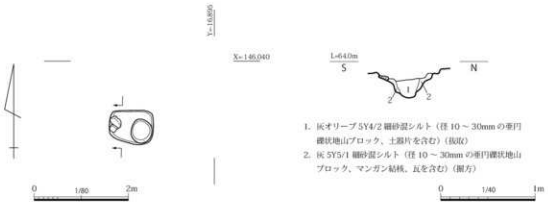


図 17　SP022 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）

素掘小溝（図 3）

調査区中央部から東側にかけて検出した。東西方向のもののみである。幅約 0.2 ～ 0.4m、遺構面からの深さは 0.05 ～ 0.15m を測り、断面形態は「U」字状ないし浅い「U」字状を呈する。主軸方向は西で北へ 2° 06′ 振れるものである。

出土遺物には土師器・須恵器・瓦器などの小片のほか、奈良時代の円面硯の破片が出土している。

（2）出土遺物

掘立柱建物

SB020（図 18、図版 17）

平瓦（1）　凸面に縄タタキ調整を施し、凸面側縁に面取りを行う。凹面は無調整で布目痕が残る。奈良時代のものである。

SB030（図 18、図版 17）

土師器杯（2）　杯 A である。口縁部外面及び内面にはヨコナデ調整を施し、底部外面は無調整である。口縁部下半から底部外面にはユビオサエ痕が残る。

土師器皿（3）　皿 A である。内外面ともに表面劣化のため調整は不明であるが、底部外面には横方向のヘラケズリ調整が観察できる。

土師器甕（4・5）　4 は小型の甕 A である。体部は内外面ともにナデ調整、口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施す。体部外面には粘土紐巻き上げ痕が残る。5 は体部は内外面ともにナデ調整、口縁部は内外面ともにヨコナデ調整を施す。頸部外面にはユビオサエ痕が残る。口縁端部は外方に面を持ち、上下に僅かに肥厚する。

須恵器皿（6）　皿 C である。内外面ともに回転ナデ調整を施す。底部外面は表面劣化のため調整は不明である。口縁端部付近の内外面に煤が付着する。

これらの遺物は平城宮土器Ⅲに属するものである。

掘立柱塀

SA050（図 18、図版 17・18）

土師器杯（7）　杯 B である。外面は表面劣化のため不明であるが、内面にはナデ調整を施す。底部外面には高台を貼り付ける。

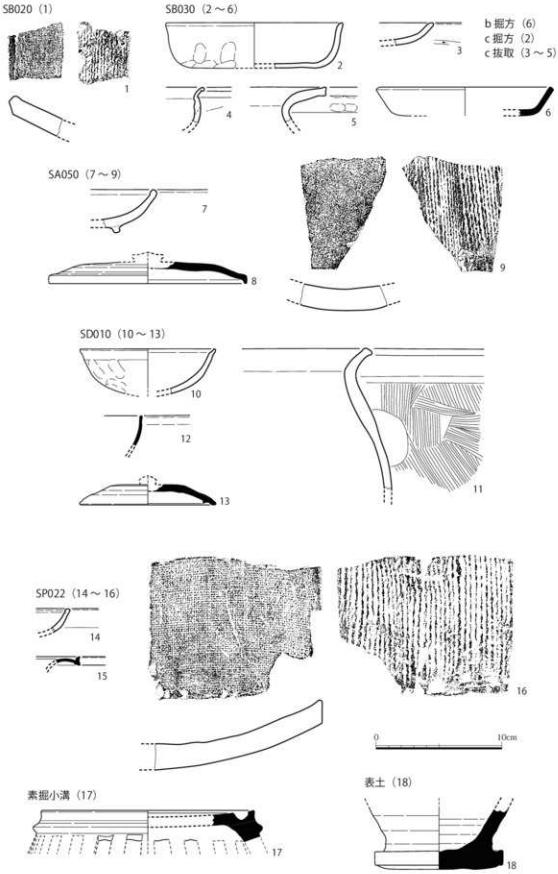


図 18　出土遺物実測図（S=1/3）

須恵器蓋（8） 内外面ともに回転ナデ調整を施す。外面端部付近には降灰がみられる。

平瓦（9） 凸面に縄タタキ調整、凹面にナデ調整を施す。凹面には布目痕、糸切痕がわずかに残る。

これらの遺物は平城宮土器Ⅲに属するものである。

溝

SD010（図 18、図版 18）

土師器椀（10） 椀 C である。内面は表面劣化のため不明であるが、口縁端部付近にヨコナデ調整を施し、外面にはユビオサエ痕が残る。

土師器甕（11） 体部は外面に縦方向ないし斜め方向のハケメ調整、内面にナデ調整を施す。口縁部には内外面ともにヨコナデ調整を施す。口縁端部は内外に僅かに肥厚する。

須恵器杯（12） 杯 E である。内外面ともに回転ナデ調整を施す。色調は灰白色を呈する。

須恵器蓋（13） 内外面ともに回転ナデ調整後、頂部外面には回転ヘラケズリ調整を施す。外面口縁部付近には重ね焼き痕がみられる。

これらの遺物は平城宮土器Ⅰに属するものである。

ピット

SP022（図 18、図版 19）

土師器皿（14） 皿 A である。内外面ともに表面劣化のため調整は不明である。口縁端部は内側に肥厚する。

須恵器壺（15） 内外面ともに回転ナデ調整を施す。口縁端部は上方に拡張する。口縁部内面には降灰がみられる。

平瓦（16） 凸面に縄タタキ調整を施し、凹面側縁に面取りを行う。凹面は無調整で布目痕が残る。一枚作りによるものである。

これらの遺物は平城宮土器Ⅲ以降に属するものである。

素掘小溝（図 18、図版 19）

須恵器円面硯（17） 脚部に長方形の透しをもつ圏足の円面硯と考えられる。内外面ともに回転ナデ調整を施す。上面には重ね焼き痕、内面には自然釉がみられる。

表土（図 18、図版 19）

須恵器こね鉢（18） 内外面ともに回転ナデ調整後、底部外面にヘラケズリ調整を施す。底部外面縁辺部は凹線状に凹む。底部外面には敲打痕の可能性がある細かな剥離がみられる。

第 4 章　自然科学分析

第 1 節　樹種同定

1. 樹種同定対象資料

平城京左京三条四坊十一坪 SB030b 出土柱材 1 点

2. 樹種同定

1）同定方法

樹種同定に必要な横断面（木口面）、接線断面（板目面）、放射断面（柾目面）の 3 断面の切片を安全カミソリを用いて作製し、サフラニンで染色後、水分をエチルアルコール、n －ブチルアルコール等の有機溶剤に順次置換した。その後、非水溶性封入剤を用いて永久プレパラートを作製した。

2）使用機器

試料の観察には生物顕微鏡 Olympus BX-53 を、木材組織の顕微鏡写真撮影には顕微鏡デジタルカメラ Olympus DP-71 を使用した。

3）同定結果

試料の木材組織は顕微鏡写真（図 19）の通りである。以下に樹種同定結果とその根拠となる木材組織の特徴について記す。樹木分類および植生分布は『原色日本植物図鑑木本編』（Ⅱ）に従った。

・柱材

ヒノキ亜科　Subfam. Cupressioideae　（ヒノキ科　Cupressaceae）

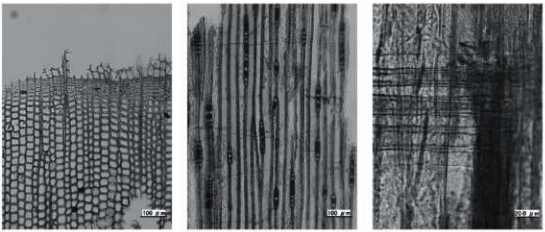
仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道および垂直樹脂道は無い。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材幅は狭い。樹脂細胞は早材から晩材への移行付近に点在、または接線状に配列する。放射組織は単列で、2 ～ 12 細胞高である。試料の劣化により分野壁孔は不明瞭である。顕微鏡写真には反映されにくいが、かろうじてヒノキ型が 1 分野に 1 ～ 2 確認できたためヒノキ亜科とした。ヒノキ亜科にはヒノキ属（ヒノキ、サワラ）、アスナロ属（アスナロ）等が含まれる。

植生分布：本州、四国、九州。

樹　　形：常緑高木。樹高 30 m、胸高直径 1 m に達する。

用　　途：建築、彫刻、家具、器具、船、漆器　等。

《参考文献》
北村四郎・村田源 1979『原色日本植物図鑑・木本編』Ⅱ、保育社
島地謙・伊東隆夫 1982『図説木材組織』地球社



木口面　板目面　柾目面

図 19　木材組織顕微鏡写真

図 20　SB030b 出土柱材

第５章　総括

第１節　遺構の変遷について

今回調査した遺構で最も古く位置づけられるものは、坪内を東西に分割した SD010 で、平城宮土器Ⅰの時期である。この時期に位置づけられる他の遺構は確認されていないため、具体的にどのような利用がされていたかについては不明である。SD010 と同様の南北方向の溝である SD005 と SD060 については、時期を判定できる遺物はないが、SD005 の南への延長上には SB020 および SB030 があることから、これらと同時期とは考えづらく、SD010 と同様の時期と考える方がいいかもしれない。

平城宮土器Ⅲの段階では、調査区中央部から東側にかけて、少なくとも１回の建て替えを伴う掘立柱建物が検出され、それを囲む掘立柱塀も確認でき、坪内を区切って利用していたことがわかる。SD010 の東側には SA050 があり、前代の SD010 による坪内地割が踏襲されている。

掘立柱建物は、SB020、SB030、SB070 があり、このうち SB020 と SB030 は重複し、位置を変えずに建て替えが行われたことがうかがえる。SB070 は柱穴規模や柱通りなどから SB020 と同時期と考えられる。

掘立柱塀は SB020 と SB030 を囲む SA040 と SA050、SB070 を囲む SA080、SD010 の西側に設けられた SA075 がある。SA040 と SB020、SA080 と SB070 は互いに柱通りが近いことから掘立柱建物に付属する掘立柱塀と考えられる。これらの掘立柱建物・塀はその主軸方位も北で東へ２°程度振れるという点でも共通しており、同時併存の可能性を補強する。

以上のことから、今回調査を行った左京三条四坊十一坪では、平城遷都後まもなく坪内の分割が行われるものの、実際に利用されるようになったのは奈良時代でも中頃まで下ることが明らかとなった。これは周辺での既往の調査の成果とも整合的である。この背景としては、恭仁京などへの遷都が候補となり、そうなると坪内の利用が本格化した奈良時代中頃は平城京還都後と考えることができる。

第２節　坪内の分割状況について

今回の調査で検出された SD010 の位置から坪内の分割について検討する。SD010 は蛇行気味に西偏する南北方向の溝である。溝心の座標は北端で X=-146,042.2780、Y=-16,896.8414、南端で X=-146,033.6112、Y=-16,897.2691 であり、X 軸が 1m 北へ行けば、Y 軸では 0.0493m 西へ進む軸方向を持つことがわかる。奈良市教育委員会による市 61 次調査（奈良市教育委員会 1984）では、四坊坊間路が検出されているが、その座標については記載がないので、公表されている図面から南調査区の四坊坊間路東側溝 SD02 の溝心を日本測地系で X=-146,355.5、Y=-16,719.2 とすると、これを世界測地系へと変換し、X=-146,009.0169、Y=-16,980.4955 となる。以上の前提から、四坊坊間路西側溝から SD010 北端への X 軸上の変化量は 24.5943m、Y 軸上の変化量は 83.2264m となり、SD010 の主軸の西偏を補正すると、両者の心心間の距離は 82.0139m となる。これは小尺 =29.6cm とした場合、約 277 小尺となる。

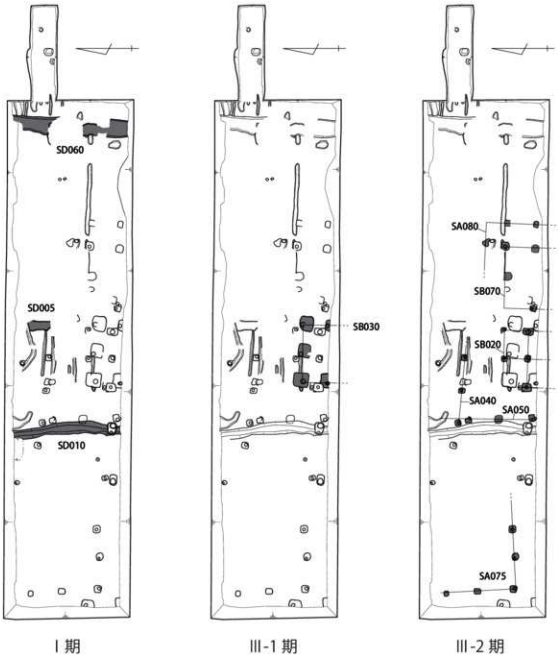


図 21　遺構変遷図（S=1/300）

平城京の条坊の施工において、大路心心間を 1800 小尺とし、大路幅を 84 小尺、条坊間路幅を 42 小尺、条坊間小路幅を 36 小尺とすれば、坊間路と坊間小路とに挟まれる坪では接する側溝心心間では東西幅が 411 小尺となる（奈良文化財研究所編 2010）。今回の調査区が位置する十一坪では、東に位置する東四坊坊間路の幅員が 30 小尺であることが判明しており（奈良国立文化財研究所 1983）、これを採用すれば十一坪の東西幅は 417 小尺へと補正される。さらに坊間路と坊間小路との幅の関係を勘案して坊間東小路の幅員を 20 小尺とすると、十一坪の東西幅は 425 小尺と復元できる。先ほど示した 277 小尺はこれの 2/3 である約 283 小尺に近似する値である。先に報告したように SD010 はやや蛇行気味になっていることを加味すれば、SD010 は十一坪を東から 1/3 に南北に区画する溝と判断することは妥当と考える。

次に、SD010 より東に位置する SD010 と同様の南北方向の溝である SD060 はどのような位置にあるかについても検討しておきたい。SD060 の溝心の座標は北端近くで X=-146,036.1468、Y=-16,872.7640、南端で X=-146,042.6118、Y=-16,873.0025 であり、X 軸が 1m 北へ行けば、Y 軸では 0.0369m 東へ進む軸方向をもつものである。同様にすると、四坊坊間路東側溝からは北端部付近で 108.8914m を測ることになり、これは約 367 小尺である。これは東に想定される四坊東坊間路西側溝心から 44 小尺ということになり、坪東西幅の約 1/9 である 46.3 小尺に近いとはいえるものの、その想定は難しい。むしろ SD010 と SD060 の心心間距離が 80 小尺となることのほうが溝の設定においては容易であると言えよう。

周辺の調査事例をみてみると、すぐ南の十二坪で行われた奈良県立橿原考古学研究所の 1986 年度調査（奈良県立橿原考古学研究所 1987）で検出された SD27 も宅地を 1/3 に区切る南北方向の溝であり、三条条間南小路で途切れるものの、道路を超えて今回検出した SD010 の延長にあるものであると評価できる。十一坪内では、他に宅地を区切る南北方向の溝は確認されていないが、今回の調査地の北東部で行われた奈良県立橿原考古学研究所による 1991 年度の調査（奈良県立橿原考古学研究所 1992）では坪を 1/2 に区切ると考えらえる東西方向の溝 SD19 が検出されている。

以上のことから、今回調査を行った十一坪内では、東西に 3 分割、南北に 2 分割した状況であり、その内部はさらに細分化されて使用していたことも想定される。また、南の十二坪から続く坪内を 1/3 に区切る溝の存在は、坪の分割について、それぞれの坪内で完結するのみならず、周辺の坪とも関連があることが推定させる。平城京内において坪内を 1/3 で分割する事例は極めて少ない。今後も坪内の分割利用については予断なく検討していく必要がある。

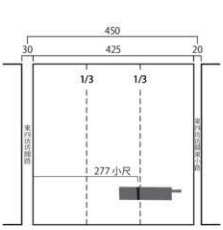


図 22　坪内における調査区と SD010 の配置模式図

《参考文献》

奈良市教育委員会 1984「平城京左京三条四坊六・十一坪(東四坊坊間路)の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書ー昭和 58 年度ー』
奈良県立橿原考古学研究所 1987『平城京左京三条四坊十二坪の調査』奈良県文化財調査報告書第 52 集
奈良県立橿原考古学研究所 1992「平城京左京三条四坊十一坪の調査」『奈良県遺跡調査概報 1991 年度』
奈良国立文化財研究所 1983『平城京左京四条四坊九坪発掘調査報告』
奈良文化財研究所編 2010『図説平城京事典』柊風舎

関連資料

図 23　検出遺構配置略図
表 1　報告遺物一覧
表 2・3　検出遺構および出土遺物一覧（1）・（2）

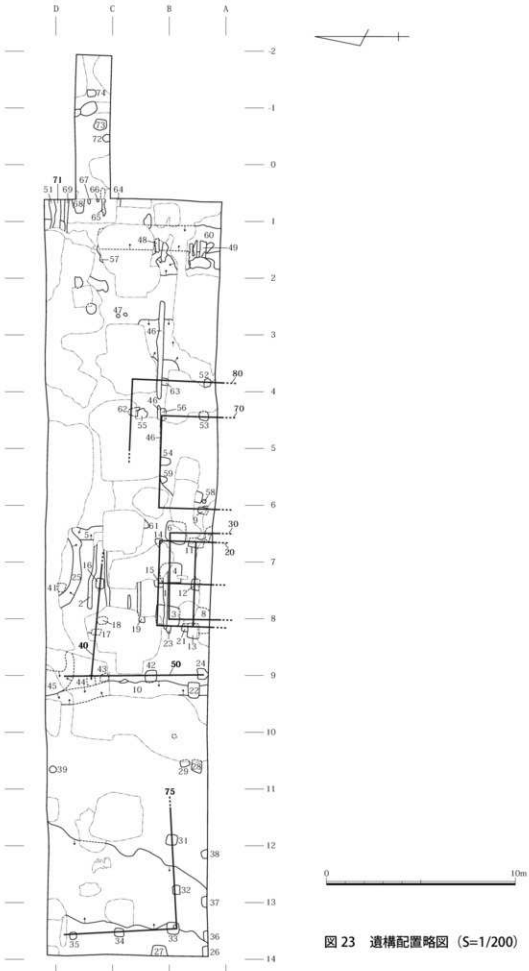


図 23　遺構配置略図（S=1/200）

表 1　報告遺物一覧

報告番号	挿図	写真図版	出土遺構 層位	種別 器種	口径（長）	器高（幅）	底径（厚）	残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
1	図 18	図版 17	SB020a	瓦 平瓦	(5.2)	(4.2)	(4.0)		密 ～ 2mm 石英・長石・黒色粒	良 灰 N4/0	
2	図 18	図版 17	SB030c 掘方	土師器 杯	(13.9)	3.6	*	25%	やや粗 ～ 2mm 長石・クサリ礫・雲母	不良 橙 2.5YR6/8	杯 A
3	図 18	図版 17	SB030e 抜取	土師器 皿	*	1.8	*	体部片	密 ～ 1mm 長石・クサリ礫・雲母	良 明赤褐 2.5YR5/6	皿 A
4	図 18	図版 17	SB030e	土師器 甕	*	(2.9)	*	体部片	やや粗 ～ 2mm 長石・クサリ礫・雲母	良 橙 5YR6/6	甕 A
5	図 18	図版 17	SB030e 抜取	土師器 甕	*	(2.9)	*	口縁部片	やや粗 ～ 2mm 石英・長石	不良 灰白 2.5Y8/1	
6	図 18	図版 17	SB030b 掘方	須恵器 皿	(13.4)	2.3	*	10%	密 ～ 0.5mm 長石・雲母	良 灰白 7.5Y8/1	皿 C
7	図 18	図版 17	SA050b	土師器 杯	*	(3.4)	*	体部片	粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫・微小砂粒	不良 橙 5YR7/6	杯 B
8	図 18	図版 18	SA050b	須恵器 蓋	(15.6)	(1.7)	*	10%	やや粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫	良 灰 N5/0	
9	図 18	図版 18	SA050b	瓦 平瓦	(9.0)	(8.0)	(2.2)		密 ～ 1mm 雲母・黒色粒	良 灰白 N7/0	
10	図 18	図版 18	SD010 断面より南	土師器 椀	(10.5)	(3.6)	*	10%	密 ～ 1mm 長石・クサリ礫・雲母	良 浅黄橙 7.5YR8/3	椀 C
11	図 18	図版 18	SD010 セクション北	土師器 甕	*	(11.3)	*	体部上半片	密 ～ 2mm クサリ礫・雲母・黒色粒	不良 橙 2.5YR6/8	
12	図 18	図版 18	SD010 セクション北	須恵器 杯	*	(2.4)	*	口縁部片	密 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	不良 灰白 2.5Y8/1	杯 E
13	図 18	図版 18	SD010 セクション北	須恵器 蓋	(10.4)	(1.6)	*	20%	密 ～ 1.5mm 石英・黒色粒	良 灰白 N7/0	
14	図 18	図版 19	SP022	土師器 皿	*	(1.9)	*	体部片	やや粗 ～ 2mm 長石・クサリ礫・雲母	良 橙 5YR6/6	皿 A
15	図 18	図版 19	SP022	須恵器 壺	*	(0.5)	*	口縁部片	密 ～ 3mm 石英・長石・黒色粒	良 灰 N6/0	
16	図 18	図版 19	SP022 掘方	瓦 平瓦	(11.9)	(13.2)	5.5		密 ～ 5mm 長石・雲母・黒色粒・石粒	良 灰 N6/0	
17	図 18	図版 19	素掘小溝	須恵器 円面硯	(16.8)	(2.5)	*	10%	密 ～ 1mm 石英・長石・黒色粒	良 灰白 N7/0	
18	図 18	図版 19	表土	須恵器 こね鉢	*	(5.0)	10.2	底部 100%	密 ～ 2mm 長石・黒色粒	良 灰 N6/0	

数値の単位は cm

表２　検出遺構および出土遺物一覧（1）

S番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
1			素掘小溝		土師器（古代）細片、須恵器（古代）椀、瓦器細片	B7・8
2			素掘小溝		弥生土器細片、土師器（中世～）皿、須恵器（古代）蓋、瓦器細片	C6・7
3	SB030c	掘方	ピット		土師器（古代）杯・甕、須恵器（古墳時代）杯、須恵器（古代）甕、丸瓦、桃核	A・B7・8
		抜取			弥生土器細片、土師器（古代）杯・鍋、須恵器（古代）細片	
		7層			木片	
4	SB030d	掘方	ピット		土師器（古代）甕・製塩土器、須恵器（古代）甕	A・B7
					土師器（古代）甕	
		抜取			土師器（古代）甕	
5	SD005		溝		土師器（古代）皿・甕・細片、須恵器（古代）杯・甕・蓋、丸瓦	C6
6	SB030e		ピット		土師器（古代）杯・壺・甕、須恵器（古代）杯・甕	A・B6
		抜取			土師器（古代）杯・甕・製塩土器、須恵器（古代）杯・壺	
7	SB030a	掘方	ピット		土師器（古代）細片	A6
		抜取			土師器（古代）壺	
8	SB030b		ピット		土師器（古代）細片、須恵器（古代）杯	A7・8
		掘方			土師器（古代）杯・甕、須恵器（古代）皿・杯	
9	SB070b		ピット		土師器（古代）細片	A6
		抜取			土師器（古代）細片	
10	SD010	セクション北	溝	奈良時代、埋土砂主体、平城１層か	土師器（古代）杯・甕、須恵器（古代）杯・甕・蓋	A～D9
11	SB020a		ピット		平瓦	A6
12	SB020b		ピット		土師器（古代）細片	A7
13	SB020c		ピット		土師器（古代）細片	A8
14	SB020e		ピット		土師器（古代）細片	B6
		抜取			弥生土器甕	
15	SB020d		ピット			B7
16	SA040a		ピット		土師器（古代）杯	C7
17	SA040b		ピット			C8
18			ピット		須恵器（古代）甕	C7・8
19			ピット			B8
20	SB020		掘立柱建物	S-11～15		A・B6～8
21		抜取	ピット		須恵器（古代）細片	A8
22	SP022		ピット		土師器（古代）杯、須恵器（古代）甕・蓋、被熱痕のある石	A9
		掘方			土師器（古代）細片、平瓦	
		抜取			土師器（古代）細片、瓦細片	
23		掘方	ピット		土師器（古代）細片	A・B8
		抜取			土師器（古代）細片	
24	SA050a	掘方	ピット		土師器（古代）細片	A8・9
25			溝	埋土礫主体、弧状		C6・7
26			ピット			A13
27			ピット			B13
28			ピット		土師器（古代）杯・壺、須恵器（古代）杯・甕	A10
29			ピット			A10
30	SB030		掘立柱建物	S-3・4・6～8		A・B6～8
31	SA075a		ピット			A・B11
32	SA075b		ピット			A12
33	SA075c		ピット			A13
34	SA075d		ピット	段下げで埋土なし		B13
35	SA075e		ピット	段下げで埋土なし		C13
36			ピット			A13
37			ピット			A12・13

表 3　検出遺構および出土遺物一覧（2）

S 番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
38			ピット			A12
39			ピット			D10
40	SA040		掘立柱塀	S-16・17・44		C7 ～ 9
41			ピット		土師器（古代）細片	C7
42	SA050b		ピット		土師器（古代）皿・杯・甕・製塩土器、須恵器（古代）杯・甕・蓋、平瓦	B8・9
43	SA050c		ピット			C9
44	SA040c		ピット			C9
45			土坑			C8・9
46			溝		土師器（古代）細片、土師器（中世～）皿・釜、須恵器（古代）細片、瓦質土器細片、国産陶器甕	B2 ～ 4
47			ピット		土師器（古代）細片	B2
48			溝		土師器（古代）細片、須恵器（古代）甕、瓦器細片	B1
49			溝		土師器（古代）杯、須恵器（古代）杯・甕	A1
50	SA050		掘立柱塀	S-24・42・43		A ～ C8・9
51			溝		土師器（古代）細片	D0・1
52	SA080a		ピット		土師器（古代）甕	A3
53	SB070a		ピット		弥生土器製塩土器・細片、土師器（古代）甕・細片	A4
54	SB070c		ピット		弥生土器細片、土師器（古代）甕・細片、須恵器（古代）細片	A・B5
55			ピット			B4
56	SB070d	掘方	ピット		土師器（古代）細片、須恵器（古代）蓋	B4
					弥生土器壺	
57			溝		土師器（古代）細片、須恵器（古代）甕	C1
58			ピット		土師器（古代）細片	A6
59			ピット		土師器（古代）細片	B5
60	SD060		溝		弥生土器甕・細片、土師器（古代）杯・壺・甕、須恵器（古代）杯・甕・蓋、平瓦	A ～ D1
61			ピット		土師器（古代）杯・甕	B6
62	SA080b		ピット			B4
63	SA080c		ピット			B3
64			素掘小溝			B0
65			素掘小溝			C0
66			素掘小溝			C0
67			素掘小溝			C0
68			素掘小溝			C0
69			素掘小溝			C0・1
70	SB070		掘立柱建物	S-9・53・54・56		A・B4 ～ 6
71			素掘小溝			C0・1
72			ピット			C1
73			土坑			C1
74			ピット			C2
75	SA075		掘立柱塀	S-31 ～ 35　L 字形		A ～ C11 ～ 13
80	SA080		掘立柱塀	S-52・62・63		A・B3・4
中世土取穴埋面					土師器（古代）杯、須恵器（古代）甕、丸瓦	
西区下層トレンチ					弥生土器細片	
表土					土師器（古代）椀・杯、土師器（中世～）皿、須恵器（古代）杯・甕・蓋・擂鉢、瓦質土器細片、国産陶器椀・皿・細片、平瓦	

写真図版

東区全景遠景（西から）

西区全景遠景（東から）

図版 2

調査前風景（東から）

西区全景（東から）

西区西壁土層断面（東から）

西区南壁土層断面（北東から）

図版 4

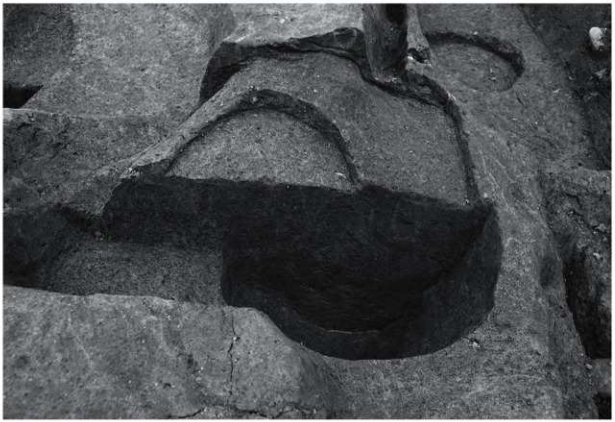
西区南東部検出状況（北西から）

西区下層確認トレンチ土層断面（北から）

東区全景（東から）

東側拡張区全景（西から）

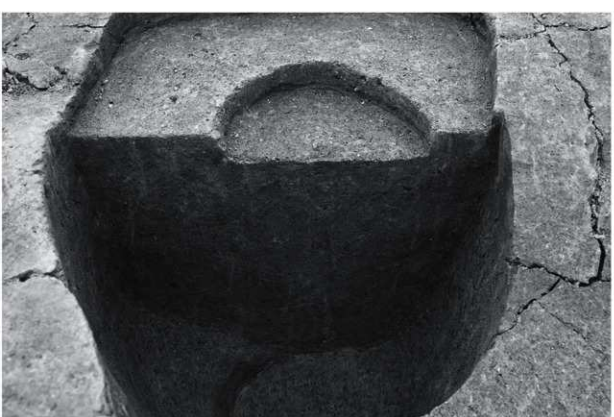
図版 6



SB020a 土層断面（西から）

SB020c 土層断面（西から）

SB020d 土層断面（西から）



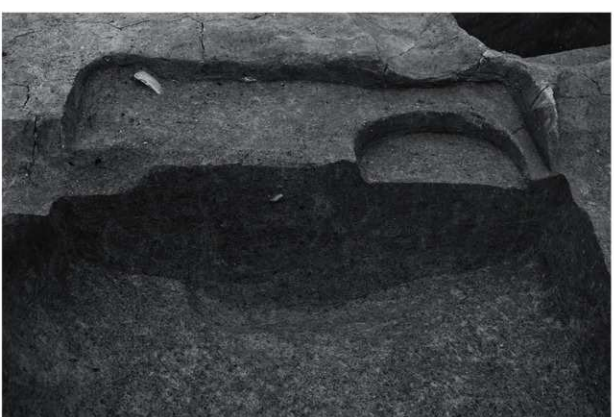
SB020e 土層断面（西から）

図版 8

SB030 全景（北東から）

SB030b 土層断面（北から）

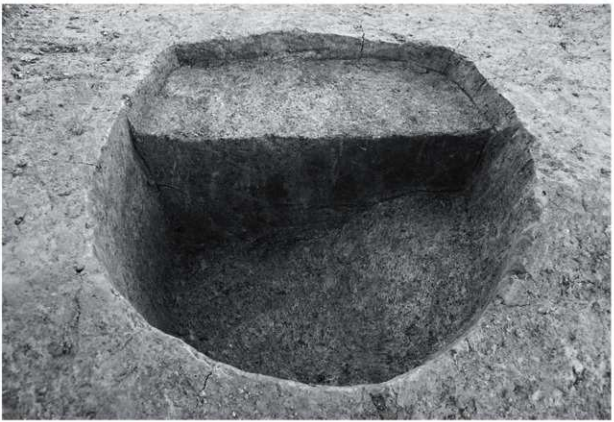
SB030c 土層断面（東から）



SB030d 土層断面（東から）

SB030e 土層断面（西から）

SB030 完掘状況（北東から）



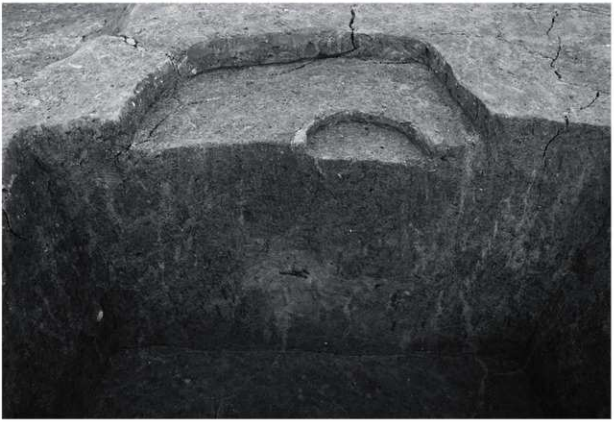
SB070a 土層断面（東から）

SB070b 土層断面（西から）

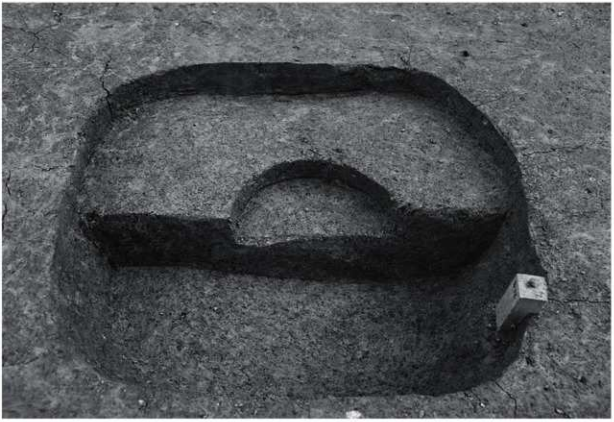
図版 12

SB070d 土層断面（南から）

SA040b 土層断面（西から）



SA050b 土層断面（西から）



SA075a 土層断面（北から）

SA080b 土層断面（北から）

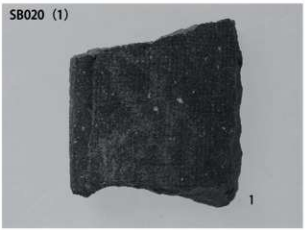
SD005 土層断面（北から）

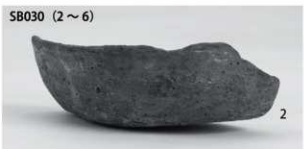
SD010 土層断面（南から）

SD060 土層断面（北から）

SP022 土層断面（東から）

SP022 完掘状況（北から）


SB020（1）
1

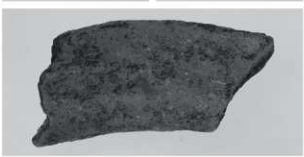

SB030（2～6）
2

3

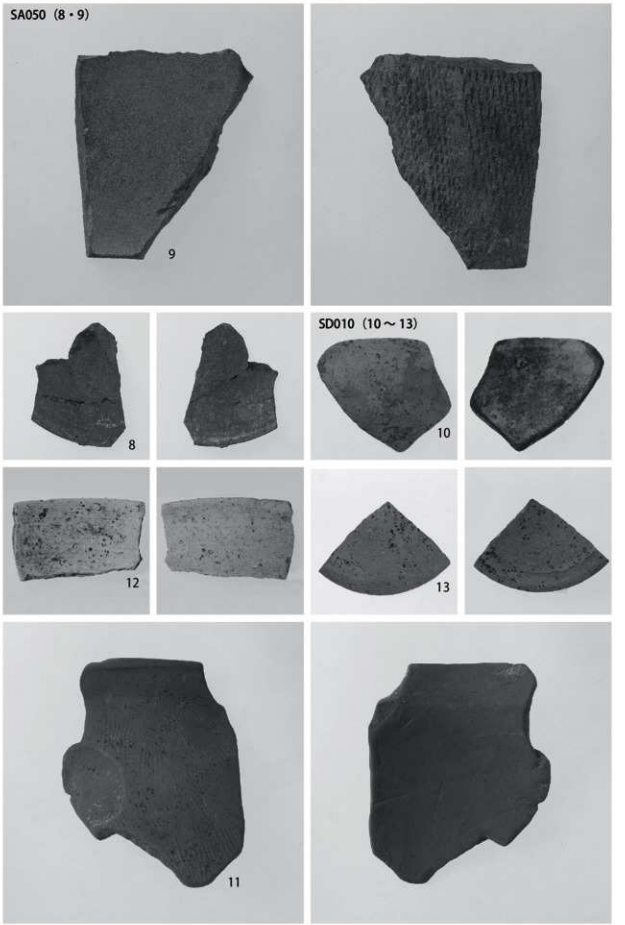
4

6

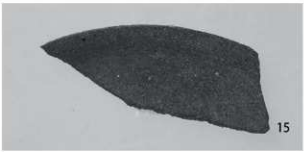
5



SA050（7）
7


SA050（8・9）
9
8
SD010（10～13）
10
12
13
11

SP022（14～16）



素掘小溝（17）

表土（18）

報告書抄録

ふりがな	へいじょうきょうさきょうさんじょうしぼうじゅういちつぼ
書　　名	平城京左京三条四坊十一坪（HJG16次）
副 書 名	令和3年度発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	村田裕介、木沢直子
編集機関	公益財団法人 元興寺文化財研究所
所 在 地	〒630-8392　奈良市中院町11番地　Tel 0742-23-1376
発行年月日	西暦　2023年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
平城京左京三条四坊十一坪（へいじょうきょうさきょうさんじょうしぼうじゅういちつぼ）	奈良市大宮町（ならしおおみやちょう）2丁目146番地1	292010		34°41′00″	135°48′56″	20210916～20211105	410㎡	共同住宅新築

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
都城跡	奈良時代	掘立柱建物 掘立柱塀 溝 ほか	土師器 須恵器 瓦	

要　約	奈良時代の掘立柱建物、掘立柱塀、溝などを確認した。溝は坪を1/3に区切る南北方向の溝であり、奈良時代の前半段階には設置されている。奈良時代の中頃になると掘立柱建物、掘立柱塀が設けられるようになる。坪内の利用状況の変遷を明らかにした。

平城京左京三条四坊十一坪（HJG16 次）
－令和３年度発掘調査報告書－

2023.3.31

（発行・編集）公益財団法人　元興寺文化財研究所
（印刷）株式会社　明新社